

世界のヒット商品

日本発

2014.3.30
(毎日)

「どんな紙幣にも対応」

沖電気が進出を予定しているブラジルでは、通貨リアル紙幣の肖像画を額面にかかわらず、同じ人物でそろえることが多い。肖像画もお札の種類を識別する材料の一つなので、技術的なハードルは高いが「どのような特色を持った紙幣にも対応していきたい」（伊沢さん）という。また、通貨危機を経験したロシアでは、米ドルの人気が根強く、ロシアの同社製ATMは、現地通貨ルーブルだけでなく、米ドルにも対応している。

ふるちとく送金 行列解消

沖電気工業

中国★よれよれのお札でも処理できるATM



窓口に行かなくてもお金の出入れが簡単にできる現金自動受払機(ATM)。正確さと速さが求められるが、海外では国ごとにお札の大きさや厚さ、紙質が異なるため、紙詰まりなどのトラブルを起こすことも少なくない。

そこで、日本のATM製造大手、沖電気工業は、さまざまなお札を処理できるATMを開発。中国でトップシェアを誇るなど、同社の海外展開をけん引している。「中国で市場調査をしていた1994年ごろ、銀行の窓口で並ぶ人々を見て進出を決めたようだ」（開発担当の伊沢裕司・海外システム設計部長）。当時、中国でATMは普及しておらず、内陸の農村部から沿岸の都市部に出稼ぎに来た人々が、ふるさとの家族に送金するため

窓口に大行列を作っていた。

国内と同じモデルの転用を検討したが、よれよれになったお札の多い中国では、うまく数えることができない。そこでお札を識別したり、出し入れしたりする機能を強化する高速センサーや精密部品を改良した海外金融機関向けのATMを開発。2002年に販売を始めた。ATMを壊してお金を持ち去ってしまうような治安の悪い地域でも大丈夫なよう、金庫の周辺を国内より10倍厚い壁で覆った。

ATMを導入すれば、金融機関側は窓口対応の行員を別の仕事に配置換えできる。仕事も効率化するとして、売り上げは順調に拡大。128種類を識別できる機種の開発にも成功した。生産台数は09年の1万台から、14年は10万台を突破する見通しだ。

現在は、インドネシア、ロシア、インド、台湾でも展開し、ブラジルにも進出する予定。伊沢さんは「海外では紙幣の切り替え、変更の頻度が高かったり、古い紙幣が長い間、流通し続けたりと、国内と事情は大きく違いますが、技術力で対応していきたい」と話す。

【永井大介】